

# 防火防災を願って60年 第60回益城町消防団出初式



6.



4.



7.



5.



3.



2.

1. 開式時、力強く行われた選手宣誓 2. 式典に華を添える重厚な演奏を行った町消防音楽隊 3. 県の防災ヘリコプター「ひばり」から、災害を想定した救助訓練 4. かわいらしい演技で観客を沸かせたアトラクション 5. 熊本市消防局の特殊高度救助工作車の風でよめく子どもたち 6. 正確な規律と機敏な動作を競う通常点検 7. 標的倒し競技で放水する団員

▶秋津川沿いで11年ぶりに行われた一斉放水  
▼昼食時、婦人防火クラブが調理した豚汁が配られた



にまわり、防火を呼びかけ、防火水槽の点検もしていた。

平成三年、台風十九号が熊本を襲った時には、益城町は停電と断水に見舞われていた。祖父たちは丸五日間、給水活動に追われたそう。また、山に入ったまま行方不明になった方を朝の六時から二日間捜索したこともあったそう。

団員の人たちは消防が仕事ではない。皆、他の仕事を持っている。にも関わらず、地域のためにこれだけ尽くしているとは。

インタビュアーをしていくうちに、消防団と祖父のイメージがガラリと変わってきた。

「じいちゃん、カッコイイね。」  
「なんだ、いきなり。」

祖父がニヤリと笑う。  
「そうだ。楽しいこともあったぞ。」

行事や活動が終わると反省会が行われた。そこではお酒を飲むこともあったらしい。

反省会なのにお酒とは思っていると、「そこで学んだことが人生のうえで重要だったかもしれない」と語り出した。

「社会ではとても大切な礼儀と人間関係についてしっかりと学ぶことができた。おかげで他の地域の方々と交流を持った時でも恥をかかなくてすんだ」そう。祖父の西原村消防団OBの方との交流は、引退した今も二十二年間続いている。

インタビュアーしているうちに、防火防災を通して消防団は「地域の絆」を作っているのだと思いついた。限界集落や認知症高齢者の増加、高齢者の孤独死が社会問題となっている今、消防団の活動はますます重要さを増していくに違いない。

地域を支えてきた祖父たちの活動を知らないまま過ごしていた私は顔が赤くなる。

「じゃ、次の話はな……。」  
今日の長話は悪くない。